アリとキリギリス：童話から学ぶ教訓シリーズ

さて、アリとキリギリス。冬に備えてせっせと働いて食糧を蓄えたアリに対して、優雅にバイオリンを弾いて何も準備せずに歌って夏場を過ごし、いざ極寒の冬が参上すると、キリギリスは食糧を手に入れる事が出来ずに死んでしまうと言うお話しです。

この童話を元に学ぶべき２つの教訓をご紹介したいと思います。

１．冬の準備と過ごし方

年中、青々と葉が茂る常緑樹の如く、長い間、存在し続ける組織と言うのは、目先の物事だけでは無く、いつか必ず来る冬の時期を凌ぐための準備をしています。

例えば、急激な景気の悪化と言う環境の変化に対して、常にその変化に素早く対応出来るような、組織構造や企業文化を作り上げる事などの準備。

そして、ただ準備をするだけでは無く、さらに強くなって春を迎えるために冬を過ごす事も必要になるでしょう。

例えば、顧客との信頼関係をさらに強くするために、雪に埋もれそうな顧客へ手を差し伸べたり、社員の忠誠心を強くするために、解雇する事を取り止めたり。

アリとキリギリスのストーリーには幾つかパターンがございまして、その一つに、アリが食糧が無くて困っているキリギリスに食糧を分けて上げて、信頼関係が生まれて、次の夏場はタッグを組んで冬のために食糧を集める準備をしたと言うパターンがございます。

このパターンの場合、アリは目先の自分達の食糧をキリギリスに分配する事で、自分達の生存率が下がるから分配はしないと言う短期的な思考では無くて、キリギリスと信頼関係を構築した後に生まれるであろう彼らの長期的な繁栄を見据えた、長期的な思考であったわけです。

と言うように、短期的な視点で物事を見るのでは無くて、長期的な視点で物事を見る事が大事と言う教訓がアリとキリギリスと言う童話を通して、私の体の芯まで届きましたが、あなたはどう思いますか？